

泉

泉ハ、イヅミト云フ、地下ヨリ涌出スル水ヲ謂フナリ、清水ハシミヅト云フ、澄ミタル水ヲ謂フナリ、或ハ清泉、寒泉等ノ文字ヲシミヅト訓ズルヲ見レバ、其間固ヨリ畫然タル區別ナキガ如シ、故ニ今之ヲ一篇ノ中ニ收ム、

〔倭名類聚抄一水泉〕泉

〔伊呂波字類抄伊泉〕泉

〔蓮步色葉集伊泉〕泉

〔書言字考節用集一乾坤〕泉

〔活法水本〕泉

〔源泉〕泉

〔和漢三才圖會五十水全〕泉

〔音泉〕泉

〔濫泉〕沃泉

〔汎泉〕沃泉

〔和名以豆美○中略〕泉

按、泉和名出水之略言也、凡井泉湧而不溢者、水氣與地氣相持也、猶血與肉、故高峯亦有水、卑地泉水亦不溢、是自然理也、

〔東雅地輿〕泉イヅミ　出水也、飛泉をタキといふはダキツ也、タキトイフキノ音に、ツの音を納めて呼びしなり、舊事紀、日本紀に見えし湍津姫命、古事記に多岐都比賣命としるせしが如き是也、タキツとは卽立水也、萬葉集抄に、水にタチミヅ、フシミヅといふあり、伏水とは出て流る、事なき水をいふ、立水とは湧出で流る、水也といひけり、タキトイヒタキツトイフは水也といふは轉語にて、ツとは萬葉集抄延喜式の祝詞にも、また中臣の祓の詞にも、高山の末、短山の末より、佐久奈谷に落瀧津、速川の瀧など云ふ事もあるは、タキツといふは、即激タキツの謂にて、沸泉の義なる也、古に湍の字讀てタキとせしは、飛湍の義によれるなり、後に湍の字をば讀てセといひ、瀧の字讀てタキといふ、倭名抄には唐韻に南人名湍曰瀧の説を引用ひたり、